

Computer Report

Vol.57 No.10 10月号 (通巻757号)

はじめの言葉

■施政演説もないまま臨時国会は、いきなりの衆院解散となった。安倍政権のやりたい放題を改めて感じさせる。自らの周辺が原因で生じた様々な疑惑／疑問について、国民に向けた丁寧な説明は、ついに、まったくないままである。文字通り、説明逃避解散である。実がないというのが安倍流だと言ってしまうとそれまでだが、これほどまでの国民軽視はない。まさに、主権在民の原則、民主主義を根底から踏みにじる暴挙である。

■政権権力は、実に腐敗しやすいものだ。そのために長い歴史の中から生み出された議会制民主主義制度であり、主権者たる国民の民意を汲み取る手段としての選挙制度である。とは言え、たった4年未満の短い期間であっても、政権権力は十分腐敗することを見せつけた安倍ファミリー政権のお粗末さに呆れかえる。臭い物に蓋をするの例えがあるとは言え、あまりにも露骨な今回の解散劇の背景／動機に開いた口が塞がらない。

■お粗末の極みである。こんな党首総裁を冠する政党を選択した先の総選挙の結果をこそ悔やみたい。その悔やみと反省をもって今回の衆院選挙に臨みたいとつくづく思う。それには、日本を変える、変わる日本を実現したいという国民の期待を木端微塵に踏みにじった前々政権をも総括しなくてはならないだろうし、同時に、改めて政権の腐敗を止めるには、国民が常に政権運営権を支配できている政治環境が必要だということを確認したい。

■前々政権と前政権は、財政再建と高福祉政策を目指して、消費税率を見直すことで一致したとされる。消費税上げ分をもって、福祉目的税とまで言った。ところが、絶対多数を確保するや安倍前政権は、この4年弱の間、高齢者福祉の削減／質の低下を断行してきた。しかも、今度は子育て重視策を消費税上げの目的とすると言っていた。その信を国民に問うと言う。これをもって、今回の衆院解散の大義名分だとまで言い切った。

■前選挙で絶対多数を確保した政権だった。本当にやる気があれば、やろうと思えば、いとも簡単にやれる政策だ。何とも片腹痛い／小賢しいとしか言いようがない言い分だ。とてもではないが、説得力はない。本来やるべきことはやらず、森友／加計学園問題など、やらない方がいいことだけをやってきてボロを出してしまった。政治の怠慢というより、政権資質として、国民への誠実さが欠如しているとしか思えない。

■2世3世どころか4世議員が増えている。奈良／平安時代に存在した絶対富裕層である貴族層の存在を思い起こさせる。彼ら富裕層に一般貧困層の生活苦を理解する能力も環境もなかったろう。世襲議員たちにも同じことが言えるのではないか。安倍首相ファミリーの立ち居振る舞いは、それを象徴しているように見える。口先での丁寧な説明をするが、次の口先では、丁寧に説明したに変化する。常識が通用しないというより、常識がない。

■安倍政権は、特定秘密保護法、安全保障関連法、共謀罪法など、文字通り、国民の信を問うべきだった重要法案を強行採決してきている。今回の選挙では、これら法案の見直しが争点になってもおかしくない。まさに国民の基本的人権にかかわる大きな問題だからである。近隣周辺国の動きに過度に反応する姿勢は要注意だし、それを引き合いに出す選挙戦／言論運動を、国民は厳しくチェックして臨むべきである。(藤見)